

たスケールの大きい、したたかな能力とは？ パリの解剖学者たちの解剖学の実態とその影響は？ パリで学んだ古代の生理学者ガレノスの陰と陽の影響は？ 彼がパリを去り、ルーヴァンを経てパドヴァ大学に迎えられたいきさつは？ パドヴァでヴェサリウスが自分の手で解剖し、局所解剖的な思想と系統解剖的な考え方を駆使し、今までの解剖学者とは質量ともにまったく異なる多くの新知見を発見し、大著「フアブリカ」とその要約ともいわれる「エピトメ」を生んだいきさつは？ 革命的といわれるこれらの書の優れた具体的な内容は？ 人生における偶然と必要のからみ合いがその将来に与える影響の不可思議とは？ わずか五年でヴェサリウスがパドヴァを去ったいきさつは？ 「フアブリカ」が後世に与えた大きな影響は？ その後の彼の数奇な人生と運命は？ スペインの皇帝の侍医になったり、パドヴァに復帰しようとして果たせなかった真相は？ 解剖学への消え失せない情熱と一五五五年に「フアブリカ」の改訂版を出したいきさつとその意義は？ 天才の晩年は？ 等々。尽きせぬ興味深い多くの問題とそのなりゆきが、それぞれのページの本文とその行間に、綿密に調査した史実に基づき、鋭くかつ緩かい眼で生き生きと描かれており、いろんな角度からわれわれを刺激し、緊張させ、考えさせ、楽しませてくれる。そして人間とは？ 学問とは？ 獨創性とは？ 学問の進歩とは？ 人間の生み出す文化とは？ などいろいろな問題を提起し、学ばせてくれる人生の書ともいえよう。

これを要するに、この詳細なヴェサリウスの伝記は、解剖学史、医学史に大きなインパクトを与え、人類の未来に輝く古典として残る辞書的な専門書であると同時に、人間というものについての生きた教養書であり、医学のみならず自然科学、人文科学、社会科学にたざさわる多くの人たちにも愛読してほしいと強く希望する。

(藤田 尚男)

〔エルゼビア・サイエンス・ミクス社、港区東麻布一丁目九一五東麻布1丁目ビル、電話〇三―三五八九―五二九〇、二〇〇一年四月、B五判、六三七頁、本体九五〇〇円〕

新村 拓 著

『在宅死の時代——近代日本のターミナルケア』

著者は日本の医療社会史とくに看取りの文化について造詣が深く、この分野の立派な著書を多数執筆しておられる。筆者は医師であり僧侶であるという関係から著者の出版物を数多く読んでいたが、この分野の多くの解明されていない部分を科学的に説き明かされる努力に対して心から敬服している。

今回筆者は『在宅死の時代』という意欲的な著書を出版された。これは明治・大正期の地主や医師の日記を通して、戦前における看取り文化を明らかにすると同時に、それが戦後

の社会にどのように変化したかを検討したものである。

本書は第一部「看取りの文化」の十章および付論、第二部「看病を職業とした人びとの系譜」の六章および付論から構成されているが、この中でとくに看取りと関係の深い章について要点を紹介すると、第一部の第一章「遠ざかる死」では、今日死に対する意識が薄らいだ理由を九項目あげ、同じ部の第二章「地主の日記にみる死の看取り」では、葬列を村中の人が見送る村を挙げての葬儀について述べている。同じ部の第八章「看取りにおける終末期の認識とケア」では、明治の中頃までは、死の判定は肉体の崩壊によって蘇生の可能性が全く失われ、長い時間の経過を経て、社会に公認される形で行われていた。それが死の私化へと大きく変化するのは明治末から大正の初めである。入院医療の浸透、農村から都市への人口移動、サラリーマンの増加などが死に対する認識を変えるにいたったと記し、同じ部の第九章「死後の処置」では、死者に対する他界の観念も社会の共同体の営みも希薄になった今日の葬儀は、もはや死者との単なる個人的な別れにすぎないものとなっていると述べている。そして同じ部の第十章「変革期にある現代医療」では、現在は死を迎える臨床の場は、医師・看護婦ら専門家のリードするところとなり、家族は後方へと退かされてしまった。その結果、患者の死は大きな不安となって襲い、家族は孤独感と疎外感に支配されていると記している。

これらの章のなかで、とくに筆者の眼にとまった章は、ま

ず第一部第一章「遠ざかる死」である。著者は本章において、現在はおおかたの者は高齢になってから死ぬる良い時代となったので、死を悼む気持が薄らいていると述べ、その理由として平均寿命の著しい伸び、高齢者は死より生きていく不安がより強く、伝統的な宗教の地位の低下などを挙げている。

ここに挙げられた項目について検討するべく、筆者の関係している某寺院（浄土宗）の法要の状況を見ると、現在の春秋の彼岸、盆施餓鬼の法要での参詣者数および先祖の祥月命日の法要の数は、二十年前に比較して約一倍半近く増加している。これは日本人の仏教は祖先崇拜と死者供養、さらに還相廻向（死んであの世に行つてまた帰ってくる）の思想が中心となつていふことを考慮すれば容易に了解できよう。このような実態をみると「遠ざかる死」についての著者の見解は一考を要すると思われる。第九章「死後の処置」についても同様なことが考えられる。なおこの問題は日本人は多神教であることも考慮する必要がある。

また、現在の住宅は広さが狭く、さらに仏壇や神棚は「封建的なもの」として忌避されたためにこれを持たない家が多いと述べているが、筆者は、今日では仏壇・神棚を封建的なものと考へている人は極めて少なく、仏壇・神棚を持たないのは経済的な理由によると考へている。その証拠に現代的な簡素な仏壇を売る店がしだいに現れている。

ついで第十章では、在宅死に関する調査研究によれば、訪問の主治医が事前に予想される臨終の状況やケアの方法、死

亡時の連絡方法などに関して家族に十分な説明をしていれば、家族だけの看取りも可能になる。という報告を紹介しているが、筆者の経験からみると、この報告は看取りの実際を樂觀しすぎていると思う。看取りの実際に熟練した人が一人は是非とも必要である。

おわりに、本書の内容についていろいろと意見を述べさせていただいたが看取りをしつくり検討するのに必要な考え方を示され、さらに貴重な資料を数多く提供していただいた努力にたいし、心から感謝するとともに今後ますます研究が発展されることを期待したい。

(杉田 暉道)

〔法政大学出版局 千代田区九段北三二一七、電話〇三一五二二四一五五四〇、二〇〇一年四月二十五日、A五判、本体二六〇〇円〕

吉田 忠・深瀬 泰且 編

『東と西の医療文化』

日本にある八十の医科系大学の中で唯一の医史学研究講座を専任教官として主宰してこられた順天堂大学酒井シヅ教授の御退任を期し、吉田忠・深瀬泰且両氏の編集で、まとめあげられた記念論文集である。

執筆者の選定がどのような意図であったかわからないが、

十八名の学究がそれぞれ専門とする領域において、西洋と東洋の医療を文化史的なパラダイムを意識して寄稿された質の高い好論文集である。

巻頭には酒井シヅ教授の「医史学と私」の短文が据えられている。「私と医史学」「医史学会と私」の二章に分けて医史学者として努力に努力を重ねて来た一筋の道の歩みを静かにつましく語っている名文である。

脳神経の研究から医史学研究に転身するにあたって、小川鼎三先生という傑出した師匠との出会いがあったことは、仏教でいう真理に至る四つの階段の第一歩を正しく踏んだといえる。

仏教で真理に至る第一段階は「説近善知識」|| 正しい師に会う、第二は「正聞熏習」|| 正しいことを聞く、第三は「如理作意」|| 聞いたことについて自からその背後にあるものを考える。最後の段階は、「通達真如」|| 根元的なことから考えて自己開発を客観的に考え、真理を発見する。酒井医史学はこの道をたどった。

小川先生亡き後での「説近善知識」ともいえる学究仲間や、同志ともなった人々が、十八人の執筆者である。酒井シヅ教授にとって学際的な御同朋、御同行であり、正統な学術の道を歩ましてくれた協同研究者たちである。

したがって、この論文集の執筆者は多岐多彩であるし、執筆テーマも内容も個性的である。その一つ一つが将来の研究展開の可能性の示唆に富むものが多い。